

今年もチェルノブイリ被災地の子供たちへの
保養支援カンパよろしく！
汚染地クラスノポーリエの子供たち10人が
ロシアの非汚染地でのノボ・キャンプに参加

この夏、ベラルーシの被災地クラスノポーリエから、ロシアの非汚染地ソラーシュの「ノボ・キャンプ」での保養に10人の子供たちが参加します。第一グループの5人は、6月24日～7月14日、第二のグループの5人は7月17日～8月6日で、それぞれ3週間です。

「ノボ・キャンプ」は、ロシアのNGO「ラディミチ～チェルノブイリの子供たちのために」が、運営しているユニークな保養キャンプです。もともとソ連時代に作られた古いキャンプ場をドイツのNGOなどの支援を得て安く借り上げ、「ラディミチ」の若いスタッフが、多くの大学生ボランティアとともに、施設を修理し運営を始めました。毎年、若者が中心になって、冬の間から子供たちの受け入れのために様々なプログラムを話し合い、実践したりしながら次の夏キャンプの内容を創ってゆきます。

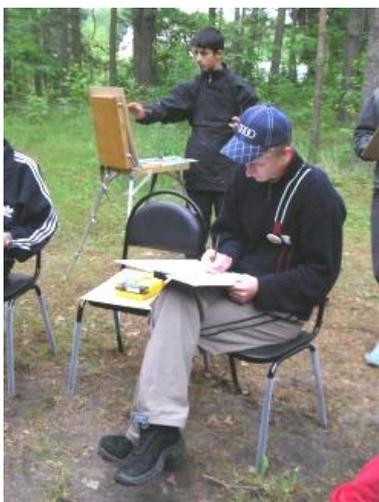
ベラルーシの汚染地のクラスノポーリアやチェリコフの子供たちが、私たちの支援でこのキャンプに参加するようになって、今年で6年目です。ベラルーシでは、今も政府のプログラムとして汚染地域の子供たちは年に1～2回、学校からクラスや学年ごとにサナトリウムなどへ「保養」に出かけますが、「ノボ・キャンプ」は、学校から行く「保養」とはかなり違ったユニークなプログラムが満載なので、子供たちにもとても人気があります。様々な年齢の子供たちがひとつのグループに編成され、ひとつの「家族」



のようにキャンプ場の小屋で寝泊まりします。ボランティアの学生スタッフがそれぞれのグループのリーダー（お兄さん、お姉さん役）になって、各グループの子供たちの主体性と協調性を尊重しながら共同生活をするのです。またコンサートやゲームなどのさまざまな行事も行われ、趣味のサークルなどにも参加することができます。「キャンプから帰ってきた子供たちは瞳の輝きが違っていました」と、毎年、大人たちも驚いています。

私たちは、被災地の子供たちがこのような活動に参加することを通じて、心身ともに健康に、また将来の夢と希望を持ちながら成長し、いつか地域のため、後輩たちのために活躍できるような人となってほしいと願っています。今年のキャンプの参加には、食費なども含めた滞在費だけで一人430ドル（約42,300円）の費用が必要です。昨年の現地訪問の際に、小児科医のベアラさんから「ノボ・キャンプの参加枠をできるだけ増やして頂ければありがたい」との希望もあり、去年は5人分だったキャンプ参加者を今年は10人に増やしました。6月からキャンプが始まるので、先に支援人数を決めて「見切り発車」しましたが、資金がまだまだ足りません。皆さんの「保養カンパ」へのご協力をよろしくお願いします！（ふりつ）

（写真はノボ・キャンプのホームページより転載）



フクシマを風化させてはならない！！

2年経っても問題が山積している！

「チェルノブイリ原発事故27周年の集い」が開かれる

4月14日、大阪市立総合生涯学習センターで、フクシマからお二人のゲストをお迎えして「チェルノブイリ原発事故27周年の集い チェルノブイリとフクシマを結んで～フクシマを核時代の終わりの始まりに！～」が開かれました。

「集い」では、まず「救援関西」の代表である長崎被爆者の山科さんのご挨拶のメッセージが代読され、その後、東日本大震災で亡くなられた方々への黙祷が捧げられました。



事務局からは「どのようにフクシマとつながっていけるのか」「繰り返さないためにどうしていくのか」と問題提起があり、私たち世代の責任として、チェルノブイリとフクシマを結んで「フクシマを核時代の終わりの始まりに！」を合い言葉に取り組みを強め、広めようと呼びかけられました。

二人のゲストからフクシマ事故からまる2年経つのに問題が山積している現状が報告されました。

飯舘村から放射能汚染のために避難し、今は福島市に住みながら全国に飯舘・福島の現状を訴え続けている佐藤健太さん（「負けねど飯舘！！」常任理事）は飯舘村で山の恵を受けて育ち、山と共に暮らしてきた「日本昔話」のような生活ができなくなって悔しい。事故に続くバラバラの避難生活、村内は放射線量によって3通りに分けられた。宅地から優先的に除染が行われているが進まず、廃棄物の仮の仮置き場も決まらない。現在日中2000人くらい村内で働いているが、放射能汚染と通勤時間がかかるので、若者はバタバタと辞めている。幾通りもの「帰りたい」のある現実等々。

いわき市で津波に襲われて避難し放射能汚染で県外へ避難した遠藤雅彦さん（「関西県外避難者の会 福島フォーラム」代表）は健康問題で村田先生、胡桃澤先生、振津さんに相談にのってもらってきた。2年経って一人一人どう自立していくかが問題になっているが、定職に就くことは難しい。また関西ではフクシマ事故の風化が進んでいるようだが、避難先の地域の人々ときちんと繋がっていきたい。「普通の生活に戻れるのはいつだろうか？」等々、問題が積算していて解決していないと訴えられました。

休憩後は事務局から「国際機関によるチェルノブイリとフクシマの被ばく健康影響の過小評価を許さないために」が報告されました。IAEA（国際原子力機関）等の国際機関は、原子力を推進するために、チェルノブイリ事故の健康影響を過小評価してきたが、フクシマでも同じことを繰り返そ

うとしている。それらを批判し、被災者に適切な支援を行おうとしない政府の施策を許してはならないと訴えました。時間的制約もあり、今後議論を継続していくことになりました。また「チェルノブイリ30周年とフクシマ5周年」に向けて国際連帯の取組みを考えてはどの提案もなされました。

福島からのお二人の話から2年経っても何も問題が解決していない厳しい現実を垣間見た思いがしました。このような取り返しがつかない事故を起こし、高まった圧倒的な「原発ゼロ」の世論を無視して、安倍政権は原発を維持し、原発輸出を推し進めています。関西電力は電気料金を値上げして何がなんでも原発を維持しようとしています。

あらためて「フクシマを風化させてはならない」と肝に銘じ、被災者との支援・交流、さらに脱原発に向けて前進しなければと考えさせられた集会でした。最後に、チェルノブイリ・フクシマを教訓に原発をゼロにし再生可能エネルギーに転換するよう求める関西電力への申し入れを決議しました。

2013年4月14日

集会決議

関西電力への申し入れ

関西電力株式会社社長 八木 誠 様

私たちは今日「チェルノブイリ27周年の集い／フクシマとチェルノブイリを結んで～フクシマを核時代の終わりの始まりに～」に集いました。

4月26日には旧ソ連のチェルノブイリ原発重大事故からまる27年を迎えます。被災地では今も放射能汚染が続き、人々は放射能の中での生活を余儀なくされています。ベラルーシでは、食品は規制値以下の食品が流通するように、全国の市場や衛生局で放射能のチェックがされ、汚染地の子供たちは年に1回は非汚染地域に保養に出かけます。今も被ばくを少しでも低減させるための努力が続けられています。また年に1回の健康診断も行われています。

フクシマ原発事故から2年が経ちました。残念ながらフクシマでも、チェルノブイリの被災地と同じようなことが繰り返されつつあります。いまだに15万人もの人々が避難先から故郷に戻ることができず、400万人もの人々が放射線管理区域相当の汚染された場所で放射能と向き合いながらの生活を強いられています。自然環境も放射能で汚染され、奪われた生活はもとには戻りません。福島原発では、今も放射能は漏れ続け事故は収束せず、事故原因も十分に解明できていません。高濃度の放射線のもと、事故収束のために多くの労働者が被ばくしながらの必死の作業を続けています。しかし、大量の汚染水漏れは、汚染水の処理もままならないことを明らかにし、停電による冷却装置の停止等、廃炉への道筋はおろか、原子炉を冷やし続けることすら困難なことが白日のもとに晒されました。余震を含め、いつまた大量の放射能放出という深刻な事態に陥らないかと不安な日々が続いています。

チェルノブイリとフクシマの二つの事故は、その悲惨で甚大な犠牲の上に、原発はひとたび重大な事故を起こせばその被害は長期にわたり、取り返しのつかないこと、そして事故収束は困難を極めることを示しました。

貴社はあくまで原発を維持しようと必死です。そのために電気料金の値上げを申請し、政府は 9.75% の値上げを認可しました。原発を動かし続けようとするれば維持・改修に莫大な経費を要し、それを電気料金に転嫁しようとしています。また受電もしていない日本原電に、貴社を含む 5 電力が支払った 757 億円（2012 年度上半期）も電気料金に含めています。

大飯原発を停止し、「原発ゼロ」でも夏を乗り切れるとの見通しも発表されています。「脱原発」は民意です。もう危険極まりなく膨大なコストのかさむ原発にしがみつくなは止めましょう。使用済み核燃料の貯蔵プールも満杯になろうとしています。全原発の廃炉を決断し、再生可能エネルギーに転換して下さい。以下申し入れします。

- ・チェルノブイリ・フクシマを教訓として「原発ゼロ」へ転換してください。
- ・原発の維持費を電気料金に計上するのをやめ、料金値上げをやめてください。
- ・大飯原発 3・4 号炉を即刻停止し、敷地内活断層の徹底調査をしてください。
- ・40 年超の運転となる美浜 1・2 号炉を廃炉にしてください。
- ・発送電分離への妨害をやめ、再生可能エネルギーの普及に協力してください。

「チェルノブイリ 27 周年の集い」集会参加者一同



4 月 26 日「チェルノブイリの日」に、関西電力に申し入れを行いました。

4 月 26 日は 27 年前に旧ソ連・チェルノブイリ原発で重大事故が起きた日です。その日にちなんで、関西電力に対して原発を止めて再生可能エネルギーに転換するように「申し入れ」を行いました。今までも毎年、若狭ネットを中心に他団体と一緒に申し入れを行なってきたものです。

あらかじめ関電に申し入れたのですが、『「チェルノブイリの日」と言われてもいつも念頭にあるわけではない」「連休前の最終金曜日で、当日は対応できる人がいない」「早い段階なら調節できることもある」等等。毎金曜日に行われている関電前行動を強く意識していて、何としても金曜日は避けたかったのでしょうか。何どもやり取りして、ともかく 26 日午後 4 時から申し入れ書を手渡すことになりました。結局、当日は 1 階のロビーの奥のスペースで申し入れを行いました。急な呼びかけにも関わらず、フクシマの子どもの保養の受け入れをされている団体や関電前行動を続けている人たちなど約 20 人が参加し、12 団体から申し入れ書を手渡しました。申し入れ書を読み上げているその最中にも、関電側は「時間がきた」とヤイヤイ言い出す始末。ただ形式的に受け取るだけで全く誠意のひとかけらも感じられない態度に参加者から怒りの声が上がりました。それでも「時間がきた」の一点張り。今更ながら関電の本質を見た思いです。残念ながら時間が短かったために全てのグループの申し入れ書を読み上げることはできませんでした。

同じ電力会社でありながら、チェルノブイリ・フクシマを教訓とするどころか全く「念頭になく」ひたすら原発維持に血道をあげる関電に、粘り強く脱原発・再生可能エネルギーへの転換を迫っていきましょう。(いのまた)

南会津交流会に参加して

【森深い山里】東京から東部鉄道で日光・鬼怒川方面へ、埼玉・栃木と電車は途中で切り離され、切り離され、だんだん短くなって、緑が濃くなって、きれいな川が流れて、するとすぐ向こうは福島県南会津でした。山間の谷間、小人がでてきそうなコテージ、見上げるような巨木の木立の中に立派な体育館、キャンプ場、近くに古民家と小川と小鳥の声、こんな良いところで贅沢に、5月25日・26日と、南会津山村道場での、交流会に参加してきました。

福島県とその周辺の原因事故被災地で子どもを育てているみなさんと、関西で保養プログラムなどの支援にとり組む人たちとの交流としての企画です。「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」は、直接的には保養受け入れの取り組みはできていませんが、若者中心に京都で取り組まれている「ゴーワークワクキャンプ」の支援を行なってきました。福島・栃木・山形から10家族、関西から10団体、現地のサポーターの方々めて、50人の集まりでした。

【互いの想いを聞く】福島の現状は、4月の集会で佐藤さん、遠藤さんの報告にもあったように、簡単には進みません。10人いれば10人の生活の健康の家族の心の悩み。個々の不安や想いを故郷で話し合いにくくなっていると、被災地の親御さんたち。「関西で子どもたちに何ができるか」と、それぞれの思いで始まった保養の取り組みですが、今後どう進めれば良いか、被災地のニーズはどうか手探りの支援者たち・・・いろいろ話して考えて、素敵なガチンコ交流会でした。



「たこ焼きキャンプ」の小野さんのコーディネートで、楽しく話し合いが始まる。

【福島県内でのキャンプはどうでしょう？】ご存じでしたか？この南会津は、汚染がほとんどないのです。離れた群馬や栃木の方に線量の高い所があったり。実際計測して確認しないと、まだらな放射能汚染には太刀打ちできません。関西明石の「たこ焼きキャンプ」の発案で、被災地から近い自然いっぱい、今日集まったこの場所に、キャンプを用意して、遠くて関西に来られなかった子どもたちに、もっと気軽に保養に来てもらってはどうかと相談がありました。かなり線量の高い地域でも、保養に出ている子どもの方がずっと少ない訳で、共感をよんでいました。

【火起こし達人】ご飯はみんなで準備して、屋外でバーベキューでした。ただのバーベキューではありません。キリキリ棒を擦って火をおこし、炭をおこさないといつまで経っても肉は食べられません。子どもも親御さんも支援者も必死の形相です。山村道場のすぐ近くで保養の取り組みをしている自然学校 NPO 法人森の遊学舎「こめらの森」の大西さんも参加者の一人でしたが、この大西さん、ただ者ではありませんでした。日本の3000m級の峰を37日で踏破、火おこしコンクール優勝、

サバイバル野人王選手権優勝、キリマンジャロ山頂で火おこし成功……。最後は大西さんにアドバイスを受けて、子どもたちは初体験の初成功で自分のおこした火でご飯を食べました。

【つながろう】保護者に聞きたいこと、支援者に言いたいこと……。いろいろ話しました。「正直経済的に厳しい。2重生活で、出発の準備にも費用がかかるので、贅沢でなくてよいので安くないと行けない」by 母。「周りに観光と思う人もいて、行かせたいけど保養に子どもを行かせることを、母同士も打ち明けられない」by 母。「健康には気を使う。家事をさせることについて親御さんはどう思われるかな？」by 支援者。「夏、汗もで驚いた」「言っても良いかな？水筒の水が腐ってた（笑）子どもいっばいでサバイバル状態なのね」「家と同じ、家事もさせて下さい」by 母。「女の子二人あずけて良いのか迷った。支援者の人間性に触れて安心した」by 父。「地元でつながる機会がありますか？」by 支援者。「集まる場所を作ろうとしている。ネットやメールの環境にない人に若いお母さん達に広げる必要を感じてる」by 母。

本当の意味で子どもの被曝を減らし被災者を守るには、保養は小さな限定された役割ですが、直接何割かの被曝を減らし、「つながる」機会を作っているのかも知れません。

政府の無策には腹が立つが、南会津の自然と素敵な人々との出会いは、幸せでした。



古民家を改装した「こめらの森」を大西さんの案内で見学

（ちなみに、この森にはヒグマ以外は、てん・オコジョ・キツネ・たぬき・月の輪熊何でもいるそうです。）（ゆみ）

